



富者の遺言



第  
1  
章  
始まり

本当にそれでいいのですか？

平成 23 年 11 月 11 日 16 時

夕暮れ時がやってきた。

太陽が僕の顔を真っ赤に染めた。

「もう夕方か、どれだけここにいたんだ？」

\*

誰に尋ねるでもなく後藤英資は言葉を吐いた。しかし彼の言葉に答える人は誰もいない。周囲に人がいないからという訳ではない。現に彼の周りには子供たちや女学生が頻繁に往来している。だけど、彼の吐いた言葉はあまりに弱々しかった。それくらい、彼は心も身体も衰弱していた。

\*

「僕がずっとここにいても、困る人間はもういないか……」

僕はこの数日、デパート前にある噴水広場に頻繁に来ている。

ここは「広場」というには申し訳程度のスペースで、そもそもデパートの本館と別館を繋ぐ通路の脇にある休憩所といった方がしっくりくるような場所だ。

でも僕は、この場所がとても気に入っている。

一見、無造作に置いてあるガラスのテーブルが、その日の陽射しの加減で無数の表情を見せてくれる。また通路が吹き抜けになっているため、夏には夕立後の虹を特等席で眺めることもできるだろう。一番気に入っているのは無造作に置いてある椅子たちだ。一見シンプルだが、よく見ると実にセンスがいい。これをデザインしたデザイナーの名前を知りたい衝動に駆られるほどだ。ただ唯一、惜しいのは吹きさらしのため、置いてあるそれらのオブジェが少し汚れてしまっているところだ。しかし、そうなることで自己主張の強さが少し軽減されて、今の僕にとっては、逆に心地よくそれらのオブジェを眺めることができた。

僕がこの広場の存在を知ったのは三年前だ。毎日、家から車で出勤する際に見ていた。

その頃は「ああ、こんなところに広場があるのか」と思う程度だった。なぜなら三年前の僕は仕事が忙しくてこの広場の存在を気にしている余裕なんてなかったから。

だけど、今は違う。

ベンチのペンキの剥がれ具合からどれくらい前に造られた物なのか思いを巡らせてみたり、噴水が吹き出すタイミングがとても考え抜かれて造られていることに関心したり。そんな他愛もないことに考えが及ぶほどに今の僕には時間があった。

だが……………僕には金がなかった

自慢じゃないが「ない」とかいうレベルの話ではない。まったくないので。しかし「ある」ものもある。借金だ。それも三〇〇〇万円もの借金だ。

僕がベンチのペンキの剥がれ具合や噴水の仕組みについて一日中考えを巡らせるのは自分の置かれている現実からほんのわずかでも離れていたかったからだ。今、僕にできることはそれくらいだろう。いや、正確に言うと、僕ができることはそれくらいだと思いたかった。

「暗くなってきたな。帰ろうかな」

僕はそう言いながらも立ち上がれなかった。帰ったところで僕のやることは誰もいない安アパートの一室で寝ることだ。そのアパートにいられる日数もあと一週間を切ってしまったが……………。

しかし僕は、ここよりはまだ暖かいはずの場所に戻ることをためらっていた。

もし、家に帰れば本当にひとりになってしまう。僕はとにかくこのベンチに座り続ける理由を探し続けた。

「帰ろうか… 帰りたくない… 帰ろうか… いや帰りたくない」

ベンチで深刻な顔をして独り言を呟いている男に、通り過ぎる皆が一樣に怪訝な視線を投げってくるが、見返すと誰もが顔を背け足早に去っていった。

「流行なんて虚しいもんだな……、みんなあんなに僕の店にやってきたのに」  
そう呟くと、だんだん涌き上がってくる怒りと哀しみに、僕は勢い立ち上がって、まっすぐ前を見て言葉を放った。

「僕の何が間違っていたっていうんだよ。できることはすべてやったのに！僕は間違っていたわけじゃない。運が悪かったんだ。とにかく運が悪かったんだ！」

間違っていないかったことを誰でもいいから認めてもらいたい、そんな情けない自己主張で僕の心は満ち溢れていた。

「……ちくしょう……」

気がつくのと、涙で目がうつすらと潤んでいた。僕はベンチに腰を下ろして、気持ちが落ち着くのを待つことしかできなかった。

平成23年11月11日17時

秋の陽はとつぷり落ちて、あつという間に夜がやってきた。街灯がチラホラ点きだ

して、僕の周りもぼんやりと人工の光で照らされ始めた。

だけど、僕はというと、目はうつろで、大量生産のジャンパーで寒さから身を守りながら小刻みに震える姿はまるで、哀れな小動物みたいだったろう。

「温かいものが欲しいな……」

僕はジャンパーのポケットに手を入れて必死で小銭を探した。コッソ、中指のツメに固い感触が当たった。ほっとした気持ちだが全身に広がる。

しかし、その硬貨を手で引っぱりだしとき、さっきよりもひどい落胆が僕を襲った。

「十円たりない」

手の平に載せた硬貨の数はいくら数えても同じだった。

「飲み物ひとつ買えないのか……」

ため息をついて、ようやくベンチを離れることに決めたとき、背後から声が出た。

「これ」

暗がりの向こうから、たしかに声が聞こえた。柔らかく芯の通った響きが少し心地良かった。

「誰？」

僕は目を凝らして暗がりの向こうを見つめた。やがてぼんやりとした影は、はっきりとした輪郭に変わった。

「これ、良かったらお貸ししますよ」

そこには十円硬貨を持った品の良い長身の老人が立っていた。見たところ、歳は七十歳位だろうが、姿勢が良いせいとか、かなり大きく見える。白いあご髭をたくわえているらしいその老人は微笑を浮かべながら僕にゆっくりと、しかし遠慮なく近づいてきた。

「どうぞ」

老人は十円硬貨を僕の手渡し、強く握った。

「あ、ありがとうございます。どなたか存じませんが、よろしいんですか？」

僕は少し不審に思いながらも老人の厚意を受けることにした。口調は実に柔和だが有無を言わせぬ不思議な迫力も同時に感じた。だけど老人の厚意を受けた一番の大き

な理由は、とにもかくにも温かいものを飲みたかったからだ。僕は広場の脇にある自動販売機に硬貨を入れた。かじかんだ手をさすりつつ急いで硬貨を投入したから、何枚か硬貨を落としそうになった。

なんとかすべての硬貨を投入し終え、お気に入りのロイヤルミルクティーのボタンを押そうとした時、またしても背後から声が聞こえた。

「本当にそれでいいのですか？」

もちろん、老人の声だ。

「はい？」

僕は老人の発言の意図が読めず思わず大きな声で尋ね返してしまった。

「だから本当にそれでいいのかね？」

「言っている意味がわからないのですが……」

老人はゆっくりと歩きながら自動販売機の前に立ち塞がった。

「だから本当に、本当にそれでいいかね？」

老人は先ほどと同じ柔らかくも迫力に満ちた声のトーンでまったく同じことを再度尋ねてきた。

「なんなんだ？ この人」

老人の意図がまるでわからない僕は、ほんの少しだが苛立ちを覚えた。

確かに十円を貸してくれたのはこの老人だ。もちろん感謝もしている。しかし、たかが十円だとも言える。十円程度で飲むものまで指図されたのではたまらない。子供じみていることは十分承知しているが、僕は今、温かいミルクティーが飲みたくて仕方がないのだ。

僕は思い切って老人に言った。

「お金をお借りしたうえでこんなことを言うのは、重々失礼だと承知していますが、僕が何を飲もうが僕の自由ですよね」

「……………」

老人は僕が逡巡の末に吐いた言葉に何も答えなかった。

「ひょっとして……僕が十円を借りたとき、あなたに頭を下げなかったことを怒って

いますか？」

その質問にも老人は答えなかった。

「何とか言ってもらえませんか？ もう遅いかもしれませんが、この通り頭を下げますから勘弁してもらえませんか？」

僕は、この状況をなんとかやり過ごそうと申し訳なさそうな態度でペコリと頭を下げた。

しかし、老人はそんな僕の態度にまるで動じることはなかった。

「**そう言うなら、もっと頭を下げてもらえるかね**」

にこやかに微笑みながら僕の目を見てそう言った。老人の予想外の一言に、僕は神経を逆撫でされるようだったが、精一杯の作り笑顔でこう返した。

「十円くらいで、随分強く出るんですね。頭を下げればいいんですね。はい、ありがとうございます！」

僕はヤケになりながら、自動販売機の前に立つ老人に頭を下げた。さっきよりも丁寧に頭を下げる僕に老人は衝撃の一言を告げた。

「**もう少し深く下げてもらえるかね**」